

仏教でいう「慈悲」とは、限らない慈しみの心をもって人びとの苦しみを取り除き安心した心に導くことです。慈悲の生き方の大切さを教えて下さったのは、私の中学時代の恩師でした。その先生は小柄で度胸のよい教師でした。私は50歳の節目の同窓会で幹事をしましたので先生に招待状を送りましたが、先生からは高齢なので欠席しますと返事がありました。

同窓会を終えて、幹事仲間と共に先生を訪ねました。互いの近況報告や思い出話に花が咲き、楽しい時間を過ごしました。帰り際に先生は「35年間今でもお盆とお彼岸に、あなた達と同級の亡くなった生徒のお墓参りをしているのよ」と言われました。

私はその言葉に衝撃を受けました。中学3年生の時に病気で亡くなった同級生がいました。やんちゃでしたが芯の強い少年でした。先生は車の免許を持っていません。同級生の入院中は、休日に毎週電車でお見舞いに出かけていました。また亡くなってからのお墓参りは、ある時は自転車で、またある時は家族の運転する車で、年に3回35年間休むことなく続けてこられたそうです。

私は、亡くなった同級生のことをすっかり忘れていました。葬儀でお別れの言葉を読んだにも関わらず…です。お寺に戻ってから私は先生に手紙を書きました。亡くなった同級生を忘れていた自分の情けなさ。僧侶であるがゆえに、彼の死を忘れてしまったことがなお辛く感じられたこと。何故忘れてしまったのか？そして、なぜ先生はそこまでできるのですか…と。

手紙を出して2日後、先生は息子さんの車でお寺に来てくださいました。手紙の返事を直接伝えるためです。先生は優しい目で私を見ながら「なぜ私がそこまでしたのか、それは私が担任をしたから。お墓参りの後はお母さんとお話がしたかったの…」と言われました。

先生の言葉は「亡くなった同級生を担当したという縁を大切にしたい。お母さんと悲し

みを共にしたい。その気持ちをお墓参りという行いで、35年間伝えてきただけよ」と私には聞かれました。最後に先生は「私はもう歳だから、あなたにお墓参りの続きをお願いしたいの。お坊さんになったあなたなら安心だわ」と言われました。先生は私にバトンを渡し、もう一度チャンスをくださったのです。亡くなった同級生だけでなく、私にも限りない優しさの「慈悲」を与えてくださいました。

ところで、お寺には自分では解決できない苦しみや、答えのない悲しみを抱えた方々もお見えになります。しかし、その解決法をお示しすることは簡単ではありません。うんうんと話を聞き、あなたの気持ちに少しでも近づきたい、安心してもらいたいと願い続けることしか私にはできないのです。でも「それでいいんだよ。慈悲の心をひたすらに伝え続ければいいんだよ」と先生から受け取った「慈悲のバトン」に気付かせてもらいました。

あれから7年。幹事仲間と年3回、プチ同窓会も兼ねてお墓参りは続いています。